



Osaka Gakuin University Repository

Title	Frank Chin <i>Donald Duk</i> 研究 Donald の新しいアイデンティティ獲得のプロセス A Study of Frank Chin's <i>Donald Duk</i> : A Process of Acquiring Donald's New Identity
Author(s)	山口 修 (Osamu Yamaguchi)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 82 号 : 1-24
Issue Date	2021.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

Frank Chin *Donald Duk* 研究 Donald の新しいアイデンティティ獲得のプロセス

山 口 修

序

中国系アメリカ人作家 Frank Chin (1940-) の *Donald Duk* (1991) は、春節の San Francisco のチャイナタウンを舞台に、12歳の少年 Donald Duk が、クーリー（苦力）として過酷な条件下、鉄道建設を進めていった中国人祖先の夢を見るという経験、また、父親やおじ、友人たちとの現実世界での経験を通して、自らのアイデンティティを問い直していくイニシエーション・ストーリーである。

本論では、イニシエーションを「子どもが既存の価値観に対して何らかの揺さぶりをかけられ、価値観の見直しをせまられるような経験をする事」（山口 2014: 2）と定義し、Donald が経験から、自身が理想とする「アメリカ人」像を見直し、どのようなアイデンティティを獲得したのかを、獲得に至るプロセスを中心に考察する。

1

アメリカで中国系移民の家庭に育った Donald は、出自としては「中国人」、一方アメリカ社会からは「中国系アメリカ人」というラベルを付与され、移民の子どもという点で生まれたときから二つの属性を帯びている。彼はこの二重の属性の不自由さから抜けだし、「アメリカ人」になることを望んでいる。Donald は、“Everything Chinese in his life seems to be awful.” (8) と、「中国人」であることを否定的に考えている。この否定的感情はいたると

ここで明らかにされるが、特に家族の面前で発した “Hey, everybody’s gotta give up the old and become American. If all these Chinese were more American, I wouldn’t have all my problems” (42) という言葉では、「アメリカ人」になりきれない彼の苛立ちが露わになっている。この発言を父親は “I think Donald Duk may be the very last American-born Chinese-American boy to believe you have to give up being Chinese to be an American” (42) と揶揄するが、それは Donald の真意をついたものだろう。このように、Donald の中には「中国人」、「中国系アメリカ人」、「アメリカ人」という3つの属性が混在していると思われるが、それぞれの意味を彼は十分に理解できておらず、理解しようとしめない。その結果、彼はまだしっかりしたアイデンティティを確立できないでいる。

ここで Donald のいう「アメリカ人」とは何か考えておきたい。*Writers on America* を論ずる拙論でも見たが、多くの移民の子どもたちが最初に理想とする「アメリカ人」とは、アメリカ映画や漫画で活躍するヒーローであり、いわゆる WASP 的「アメリカ人」像を代表すると考えられているイメージである。² 西山隆行は「坩堝論」において「坩堝」に入るのを認められたのは「ヨーロッパ系のエスニック集団のみ」(21) と述べているが、ここでは WASP という言葉をこのようにアメリカで主流を占める集団と解釈し、アジア系などのマイノリティとは一線を画す集団としておく。Donald が憧れるのは、この集団が主流となり生み出した価値観をベースにした「アメリカ」である。西山はさらに、アメリカ社会の底流にある価値観をトマト・スープに例え、「トマト・スープでは、パセリやセロリなどが風味を増すために加えられることはあっても、いずれはベースのトマトと一体化して原形をとどめなくなってしまう」(21) と述べる。もちろん、トマトだけのスープは味気なく、多様な具材の存在によってスープに深みが出るのだが、Donald はそれに気づかず、父親の発言が示すように、具材の風味さえ否定し、完全にスープに溶け込むこと、具材ではなくトマトになること、を望んでいるかのようである。

Donald はどのような「アメリカ人」像を抱いているのだろうか。彼が憧れるのが、国民的ダンサー Fred Astaire であり、主流のヒーローの一人である。“One day they will look up and see him dancing in one of his old movies. ‘Oh, it’s Fred Astaire!’ they will say. ‘Why, he used to be Chinese from Chinatown. His name was Donald Duk then.’” (45) と Donald が自ら想像するように、ダンサーとしてアメリカ映画に出演し、中国人としてではなく Fred のような「アメリカ人」ダンサーとして見られることを夢見ている。マイノリティに属する Donald にとって、映画の主役になるということが、「アメリカ人」である証だからだ。

夢の中での Fred との次の会話からも、Donald の願望が感じられる。

“[...] You know why after all the years they’ve [Chinese have] been here, they’re not more American?” Donald Duk asks.

“More American?”

“American! Like you and me. The kind of people who make American history. The kind of people actors play in American movies.”

“Oh, yes, those kind of people.”

“You know why the Chinese can’t be that kind of people?”

“Why?”

“Passivity.”

“That?”

“Not only that! They’re not competitive. Can’t stand the pressure.” (92)

アメリカの歴史を作るような人、アメリカ映画で「アメリカ人」として演技するような役者が、Donald のなりたい「アメリカ人」であり、中国人としての

アイデンティティを否定し、そのような「アメリカ人」になることに強い憧れを抱いていることが示されている。

Donald が中国性を否定する場面をもう一つ挙げておく。この否定は小説の舞台背景となる春節を嫌っているところにも表れている。

Oh, no! Here comes Chinese New Year again! It is Donald Duk's worst time of year. Here come the stupid questions about funny things Chinese believe in. The funny things Chinese do. The funny things Chinese eat. And, "Where can I buy some Chinese crackers?" (3)

物語中盤で、まさにこの質問を白人男性から受けるが、Donald が耳が不自由なふりをして男の質問を無視する場面がある (82)。他者から中国に関する質問をされること自体を否定するのは、質問されることで、自分が「中国人」であることを否応なく意識させられるからだ。

では、彼のこの否定的中国観はどこから生まれてきたのだろうか。子供の価値観形成には、家庭環境や学校の影響が大きい。まず家庭環境について、父親との関係を中心に論じていく。移民の子どもの特徴として、扉の内側、すなわち家の中では自文化を、扉の外側に一歩出るとアメリカを、強く意識させられるという点が挙げられる。Donald もチャイナタウンでの家族との生活では、中国的なものが身近に存在し、その価値観を押しつけられる。元広東オペラの役者で、今はレストランを経営する父親について Donald が "Everything Chinese in his life seems to be awful. His father is awful." (8) と述べるのも、父親から「中国人」であることを強く意識させられるからだ。また、"Only the Chinese are stupid enough to give a kid a stupid name like Donald Duk" (2) といい、"His own name is driving him crazy!" (2) と、自分の名前に関しても父親への不満を示す。

不満の原因である、父親によって名付けられた Donald Duk という名前について見ておこう。Donald Duk はいうまでもなく Walt Disney の漫画に登場する Donald Duck に由来する。³ Donald Duck はアメリカを象徴する存在で、父親がこの名前をつけたのも扉の外側である「アメリカ」社会を意識したからであろう。しかし一方で、Donald が “Looking Chinese is driving him crazy!” (2) というのは、そのアメリカ的名前にもかかわらず（確かにふざけた名前ではあるが）、現状、彼が理想とする「アメリカ」が、見た目が中国人であるため、自分を異質な存在としてしか受け入れてくれないことへの憤りだと考えられる。この発言には、その名が生み出す嘲笑への不満、命名によって中国人としての外見と Donald Duk という名の間にギャップを生み出したことに対する父親への不満が強く表れており、彼の中国嫌いの一因になっている。

父親は模型飛行機を作っているが、全部で百八機ある機体には一機一機に中国の古典『水滸伝』の英雄百八人の絵が描かれており、それらは春節の最後に火をつけて飛ばされることになっている。そこには、中国文化の根底にある「天命」という考え方が反映している。「天命」とは、父親 King の説明では “Nothing is good forever. What goes up will come down. Times change.” (12) ということであるが、Donald はそれを十分に理解できず、その中の一機を夜中に盗み出し燃やしてしまう。この行動には、中国文化に固執する父親への反抗が現れている。

しかし不満が表わされる一方で、父親については、“He is the best cook there [Chinatown].” (8) と、真剣に料理に取り組む父のコックとしての腕を高く評価している。また、夜中に叩き起こされて、街を歩くときいじめられないようにするためのアドバイスを受けたときも、“Donald does not like his dad waking him up like that and yelling him. But what the old man says works.” (4) と父親の助言の正しさを認めている。

このように父 King Duk は、物語を通して扉の内側の世界を代表する存在として中国的な価値観を身を以て Donald に示し続ける役割をもち、Donald の

中国嫌いを助長させる存在である。だが同時に、不満をもたれながらも信頼できる存在でもある。

では、扉の外側、学校はどうか。歴史の教師は授業で次のように語っている。

“The Chinese in America were made passive and nonassertive by centuries of Confucian thought and Zen mysticism. They were totally unprepared for the violently individualistic and democratic Americans. From their first step on American soil to the middle of the twentieth century, the timid, introverted Chinese have been helpless against the relentless victimization by aggressive, highly competitive Americans. [...]” (2)

先の Fred とのやり取りには、この教師の発言がそのまま Donald の考え方に反映している。Donald はこの教師を嫌っているが、中国在住の経験もあり知識の点で自分より優れていると考えているため、彼の発言をそのまま受け入れてしまう。その結果、「天命」についても、Donald は “Chinese are artsy, cutesy and chickendick” (3) と、勝手に解釈してしまう。Donald が教師の影響力を強く受けていることがわかる。

Catherine Gouge は、この場面を次のように説明している。

At the start of Chin’s *Donald Duk*, Donald’s access to history is typically “American.” He knows what he knows about the Chinese primarily from what he has learnt in his American prep school, from American movies, and from what he has seen on American television. (275)

ここで述べられる “American” は、先に見たいわゆる「アメリカ人」であ

り、まさに「アメリカ人」が歴史を学ぶように、歴史を教えられ、その教える側の価値観を Donald は無自覚に自分の考えとして取り込んでいる。Donald が教師の教える内容に不快感をもちつつそれに反論できないのは、Gouge が述べるように、自文化を“self-identify” (276) できていないからだ。そもそも Donald には自文化を理解しようとする意思すら欠如している。

以上見てきたように、Donald は自分の「中国人」としての出自の不自由さに強い不満をもっている。彼の中国嫌いの価値観形成には、Donald Duk という名前、そのように名付けながら中国文化にこだわり続ける父親、さらに、中国人へのステレオタイプな見方を教えている学校教育の影響がある。Donald は、自分の中にある、「中国人」、「中国系アメリカ人」、「アメリカ人」という3つの属性を十分に理解できず、「アメリカ人」教師の語る中国人像を自らの「中国人」、「中国系」の属性として内面化してしまっている。そのため彼は、「アメリカ人」になるには、「中国人」の特性を排することが重要だと考えるのである。

2

次に、Donald が理想とする「アメリカ人」像の見直しを迫られる経験がどのようなものだったのか、現実世界における春節中のチャイナタウンでの経験と、夢の中で大陸横断鉄道建設の経験という二つの経験から考察していく。

春節を迎え、街全体が中国一色に染まる中、Donald の白人の友人 Arnold Azalea が彼の家に数日滞在することになる。Azalea 一家は Arnold だけでなく、両親もまた中国文化に高い関心を持ち、Duk 一家と親しく交流している。読者は、Duk 一家の Arnold やその両親への語りを通して、中国系アメリカ人の日常生活や祝祭期間の生活を知ることができる。⁴

この春節の現実世界で中心となる出来事の一つが、Donald が模型飛行機を燃やすという行為である。彼は、おじにそれを目撃され父親への謝罪を求められた上で、次のような話を聞かされる。

“[...] I know how that snooty private school you go to has pulled the guts out of you and turned you into some kind of engineer of hate for everything Chinese, but your real name is your Chinese name. And your Chinese name is not Duk, but Lee. Lee, just like Lee Kuey. [...]” (23)

自分の態度を客観的に指摘されるとともに、Duk と改名する前の一家の姓が Lee であり、彼が燃やした飛行機に描かれた『水滸伝』の英雄 Lee Kuey (李達) と姓を同じくするものであることを教えられるのである。この指摘は Donald にとって重大である。なぜなら、Duk という英語名によって Lee という自らの中国人としての出自が覆い隠されていたことに気づかされるからだ。

Donald は毎晩見る大陸横断鉄道の夢を “bad dreams” (23) と呼び、おじにその夢を話す。おじは、曾曾祖父がその鉄道会社で働いていたことを教え、完成記念で撮影された Golden Spike Ceremony の写真について Donald に次のように語る。

“Did you ever wonder why there are no Chinese in that picture? Your great-great-granddaddy and lots of other Chinese were there. So why don't you find a picture of your great-great-granddaddy there? [...]” (24)

“Look at how young we were when we came to build the railroad. Look at that kid. He's on foot in the snow, and smiling. He can't be more than sixteen. Your great-great-granddaddy was even younger than that. More like your age, kid. [...]” (24)

Donald は、“He [Donald] has been there. His feet say so. He recognizes

the snow. It is the first winter the Chinese will spend in the mountains.” (24) と、このとき初めて自分の見ている夢を実体験であるかのような感覚をもって自覚する。そして、彼の視線は自らのアイデンティティ形成の根源たる祖先たちへと向かっていく。

Perhaps Donald Duk is too anxious to get to sleep and dream. The other nights the dreams came, they are all bad because they are all about Chinese he does not understand. Now he wants to dream for a look at his great-great-grandfather. He counts it off on his fingers before his eyes. The father of the father of the father of the father. Great-great-grandfather. Four generations. He is the fifth. Five generations ago. Five Duks or Lees ago, a relative is young and working on the transcontinental railroad, from the west end of the line. “Okay, I’ll tell him [Duk’s father]. Okay. I’ll build it [the model].” (25)

このように曾曾祖父という具体的な家族のイメージをあたえられることで、これまでほとんど認識してこなかった過去の中国人たちが急に現実味を帯びた存在として Donald に意識されるようになる。そして同時に、彼自身、鉄道建設に携わる者たちの中に入り込み、夢の世界を現実であるかのように生きること、当時の労働者たちの行動や考えを具体的な出来事として経験していく。その経験は、現実社会での父親への謝罪、模型の作り直しにもつながっていく。

春節元旦、Duk 一家と Arnold は宴会の買い出しに出かける。元日になぜ店を休まないのかと尋ねる Arnold に Donald の父親は、“The first day is for the close family” (31) といい、おじ Donald が率いる劇団員も家族であり、総勢百人を超える人たちに料理をふるまうつもりであると説明する。中国人にとっていかに家族が大切であるか、その家族の範囲がいかに広いかが強調され

る。春節で賑わう街中での父やおじ、Arnold との会話は、自分が中国文化を中心とした社会の中で生きていることを Donald に強く意識させる。

飛行機のことを謝ろうと厨房に入ってきた Donald に、元役者の父は鷹のような目で調理しながら、主役である関公を演じるには、多くの制約がかかり多大な自制心と忍耐が必要だと淡々と話しかけ、謝罪する息子に

“If he wants to make a model airplane, he doesn’t have to ask me. If he wants to replace the plane he stole, I don’t okay talk. Only action.” (70)

と、謝罪を言葉ではなく態度で表すよう諭す。役を演じるときの心構え、調理する姿勢を示し、それを父親自身が息子の目の前で実践している。自分には厳しく、しかし他人には気前よく寛大にという中国文化を重んじる父親の生き方を直接体験することが、現実世界で Donald が価値観を見直す一つの要因になっている。そういう意味では、父親は、おじ Donald とともに、イニシエーション・ストーリーにおけるメンターとしての役割を果たしている。

一方、夢の世界では鉄道敷設の世界記録を作るという場面が展開する。以下は、土砂降りの中、観客のいるところで記録を作れとせまる経営者 Crocker と現場監督 Kwan との会話である。

“I want our guests to be comfortable when I make the new record.”

“You make the record?” Kuwan shouts. Kwan grabs the hammer out of Doong’s son’s hands and throws it up to Crocker on horseback. “You better be use some of that to break the record, don’t you think?” [..]

“I own the railroad, Kwan. You can’t order me..”

“I build a railroad, Ah-Mist. Croker. You do no own nutting me.” (76-77)

このやり取りは、経営者側がいかにも理不尽な要求を労働者側にしていたのかを示すと同時に、“made passive and nonassertive” (2) と教師から教えられていたのとは異なる中国人像を明らかにする。

さらに別の晩、Donald は Arnold と二人、一日の鉄道敷設記録達成の日の夢を見る。敷設を鼓舞するのであろう、獅子舞の踊り手の一人として Donald はその現場に立ち会っている。一日に16キロを敷設し記録を打ち立てたとき、彼方から梁山泊の英雄たちが関公を先頭にやってくる。

“Who are they?” Donald asks.

“You don’t know them?” the girl his age asks, full of surprise and a little suspicious. He’s surprised himself. He knows them. He knows them, so why does he ask in his dream?

“I have only heard about them. I don’t know what they look like. I’m from San Francisco, not China.” (115)

Donald はすでに百八人の男たちが何者であるか知っているにもかかわらず、彼らが何者かと近くの少女に問いかけている。それはなぜか。英雄の描かれた飛行機を燃やしたことからわかるように、自分のルーツと認めがたい中国、その古典文学の登場人物としてしか彼らを見てきていない Donald にとって、同胞による偉業達成を祝福するために現れた英雄たちは、彼がそれまで考えていた英雄たちとはまったく異なる存在として意識されたからだ。次の Soong Gong (宋江) の言葉も、Donald に自分の出自の見直しを迫るものだった。

“You have no reason to remember anyone as ignorant and

without skills as myself. But you would do me a great honor if when the world turns harsh against the honest and incorruptible, you look me up before you sell out. [...]” (116)

その直後、Donald は現場監督の Kwan から、最後の枕木に他の中国人たちと同じように自分の名前を書き込むようにいわれる。しかし、Donald は “He does not know what to say, or what he wants to say.” (117) と戸惑い、“Are you ashamed of laying The World Record, boy?” (117) と Kwan にいわれ、筆を取ったところで、姉たちに起こされ夢から覚める。

Donald のこの戸惑いは何だろうか。記録達成現場にはいたが彼はずっと工事に携わっていたわけではない。また現実世界では、そのような過酷な条件下、困難な作業を強いられていた中国人たちがいたということも知らなかった。アメリカの歴史を作りたいといいながら、過去の歴史的事実を知ろうともしなかった。これまで自分の中国性を否定し続け、祖先たちの過去の労苦に思いを寄せることもなく、祖先たちから現代へと通じる共通の英雄たちへの関心もなかった。そういった自文化への無知に対する疚しさがあったからではないか。

Donald が自文化を知らないことに気づかされるエピソードは他にもある。ある朝、本屋でカードに描かれた Soong Gong を見つけ、これは誰かと店員に尋ねる。“Where are you from, boy?’ the woman asks. ‘You a Chinatown kid?’” (120) という店員の反応は、Donald が Soong Gong を知らないことに驚き呆れている様子が見て取れる。

また、Arnold と図書館で鉄道建設時の本を見て、そこに白人の名前だけが掲載され中国人の名前が一人も出ていないことに気づく場面も自分の無知を自覚させるものだった。家で父親にそのことを話すと、父親は次のようにいう。

“They don’t want our names in their history books. So what?”

You're surprised. If we don't write our history, why should they, huh?"

"It's not fair."

"Fair? What's fair? History is war, not sport! You think if you are a real good boy for them, do what they do, like what they like, get good grades in their schools, they will take care of you forever? Do you believe that? You're dreaming, boy. That is faith, sincere belief in the goodness of others and none of your own. That's mysticism. [...] You gotta keep the history yourself or lose it forever, boy. That's the mandate of heaven." (123)

これらの言葉は、Donald に「アメリカ」に住む中国系の立ち位置を、より明確に自覚させた。そして、以前も父親から教えられていたにもかかわらず、「天命」が、自分の解釈である“Chinese are artsy, cutesy and chickendick” (3) とは違うものであることを実感する。

このような経験を通して、中国嫌いという彼の価値観は徐々に変化し、Donald の見た夢の終わりに近い場面では、さらに彼に価値観の見直しを迫る。中国人の名前の書かれた枕木を使用することを拒絶した自分への中国人たちの抗議を恐れて、Crocker は次のようにいう。

"[...] The Last Spike will be hammered home, the telegram sent, our photograph made to preserve a great moment in our nation's history, without the Chinese. Admire and respect them as I do, I will show them who built the railroad. White men. White dreams. White brains and white brawn." (131)

白人の優位性が強調され、Donald がこれまで考えていた「アメリカ人」の本

質に疑念が生じる。また、図書館から借りた本に掲載されていた、鉄道がつながった日に撮影された写真に、中国人が写っていないことを再確認したことで、Donald は白人対中国人という関係を強く意識するようになる。

こうして自らのアイデンティティについて深く考える契機が与えられ、Donald は自らの価値観を見直し始めるが、それが Arnold との間に軋轢を生む。Donald と Arnold が Duk 一家と一緒に鉄道完成日の写真を見ている場面である。

“See, there were soldiers to keep us out of the picture. Don’t you think we belong in this picture more than any of these white men?”

“I’m white,” Arnold Azalea says.

“You’re white, but you are not white like these guys. I like you. I don’t care what you are.”

“I care what you are.”

“What am I?”

“Are we fighting? Why?” Arnold asks. “I thought we were on the same side.”

“That’s what I thought too.” (133)

ここには異人種に対してどう接するかということに対する Donald と Arnold の考えの違いがはっきり示されている。自らを「アメリカ人」と考える Donald は、その前提として Arnold を同類として考えている。だから白人であっても「気にしない」のである。一方、Arnold は両者が同類ではないことを前提にしているのではないか。同じ夢を見、中国人の置かれた立場がどのようなものであるかを理解しているからこそ、彼は “we were on the same side” と Donald と同じ側に立っていると素直に話ることができる。しかし、Arnold は自分が中国人でないことを自覚している。だから、中国を知ろうと

し、中国人である Donald の立場を「気にする」のである。しかし、その Arnold の考え方を Donald は理解できていない。それゆえ、彼の元を去った Arnold に対して夜の街を見ながら “Gone with the tourists. Arnold will be gone by now too. Another tourist.” (135) と呟き、中国文化に深い理解を示す白人の友人であった Arnold に失望してしまうのである。この出来事もまた Donald に自分の中国性を意識させる契機となる。

その夜更け、慈善で米を配る父親やおじの姿を見つけた Donald がなぜこんなことをするのか尋ねると、父親は “Tradition.” と答え、おじが “It’s everybody’s birthday, today. The sixth day of the first month of the new year.” (137) と説明を加える。ここでもまた中国の伝統を経験することになった Donald は、父に自分の夢の話始める。

“Everything I dream is true. Or was true. I dreamed we set a world’s record, and it’s true. [. . .]”

“We?”

“The Chinese. The Chinamans who built the railroad. I dream I’m laying track with them when I sleep, and nobody knows what we did. Nobody, just me. And I don’t want to be the only one who knows, and it makes me mad to be the only one who knows, and everything I dream makes me mad at white people and hate them. They lie about us all the time.”

“No, don’t hate all the white people. Just the liars,” Dad says.
(138)

“But you know truth. The truth came looking for you in the dreams. You go look for the truth in the library. You know what is true. [. . .] That makes your life hard, kid. You have the choice. If you

say Chinese are ching chong, you have to choose to do it and lie about what you know is true. And you remember one thing too: Soong Gong, the Timely Rain, came to you in your dreams and asked you to go to his hideout and join his heroes. Boys and girls don't dream like that over here. You must be something special. Maybe. (139)

父親は Donald に、中国人を馬鹿にし嘘をつき続けるのか、それとも中国人としての自覚をもち真実を語るのか選択を迫る。Donald はこの問いかけに直接答えてはいない。しかしその直後、夜食を食べながら、“Why do you call them [doughnuts known as *demons boiled in oil*] *yow jow gwai*” と質問し、“Please, please, I'm listening this time. I really want to know. I'm not faking.” (141) と父親に答えを懇願しているところから、明らかに扉の内側、自文化への関心が高まっていることがわかる。また、Donald 自身はつきり気づいていないが、自分を含む “we” という人称代名詞の使用は、Donald が中国人の一員になったことを示している。

学校では、教師が中国人たちは他の移民と異なり開拓者の意思をもたず “sojourners” (150) と呼ばれ、鉄道建設従事者たちは “Crocker's Pets” (151) と呼ばれていたと教え、再び “Their passive philosophy and noncompetitive nature rendered them ripe for exploitation and victimization.” (151) と、中国人へのステレオタイプな見方を話し始める。その内容に、Donald は “You are incorrect, sir” (151) と大きな声を上げ、“You are . . . sir, Mr. Meanwright, not correct about us being passive, noncompetitive.” (151) といって、冬の厳しい Sierras でのトンネル工事、未払い賃金へのストライキ、線路敷設の世界記録など、教師が教える消極的中国人像を覆す史実に基づいた中国人の行動を挙げ、“And it is badly informed people like you who keep us out of that picture there.” (151) と反論する。その時、Arnold もまた “That's right. Mr. Duk is correct, Mr. Meanwright. We checked the books out of the

library, and here they are.” (152) と Donald を援護する発言をする。その勢いに、教師は “Gentlemen, boys, you have caught me completely unprepared for . . .” (152) と答えるしかない。

この一連の出来事は、学校教育が Donald の考え方に大きな影響を与えていたこと、教師のいうことが全て正しいわけではないこと、つまり先に見た “Donald’s access to history is typically ‘American.’” (275) という事実に基づかせると同時に、Donald に自分が中国人であることを “self-identify” (276) させたといっているだろう。さらに、中国人もまたアメリカの歴史の作り手であるという認識も得たのではないだろうか。

Azalea 一家との席上、Donald の父親 King と Arnold の父親が模型飛行機の話をし、Arnold の父親は模型飛行機について “It is too fragile not to destroy. To see it burn up in midair or explode in flight—that is how an airplane should die. In flight. In its medium, so to speak.” (157) と、自らも飛行機を燃やしていたことを話す。これは、King の “Times change.” (12) という「天命」の説明と共通するものがある。この場面は、白人、中国人といった人種を越え、共感できるものが存在することを示しているように思われる。

その席で父 King に、自分のよき理解者である Arnold と仲直りするよう促され、Donald は Arnold と和解する。この和解は、次の会話に示されるように Arnold が中国文化を深く理解しているからこそ彼を信頼できるのだと Donald が自覚することによってもたらされている。

“I bet we’re the first kids to make Mr. Meanwright read books, huh?”

“Can you believe it? He never even heard of Kwan Kung before.”

“The god of war, plunder, literature . . .”

“Yeah, the god of fighters, blighters and writers.”

“Wow, what a great day it’s been, huh, Donald?” (159)

同じ白人であっても、中国文化を表面的にしか理解していない教師に比べ、中国文化のよき理解者である Arnold が自分にとって大きな存在であることを Donald は理解したに違いない。物語の最後の方で Donald と Arnold が龍の一部となって街中をパレードするシーンは、二人が人種を超えて一体感を体験していることを象徴しているようである。⁵

以上見てきたように、Donald は夢の中で大陸横断鉄道建設という出来事を自ら体験する中で、授業では教えられない多くの歴史的真相を発見し、アメリカ建国の担い手として、中国人の果たした役割も大きかったことを知る。その体験は、春節で賑わう現実世界で彼に自分の中国人としてのアイデンティティを再確認させる契機となった。それは、父親やおじたちによって示されてきた中国的価値観を彼らと共有することでもある。白人の側の視点で語られる中国人像に対し、Gouge が “his inability to recognize such inaccuracies (to tell what is ‘fake’ from what is ‘real’)” (275-6) と指摘していた当初の能力欠如の状態から、“fake” を見極め、それに反論し、自文化を正しく主張することができる能力を獲得したとあってよい。また、自文化の価値を理解するには、Arnold のような自文化を理解しようとするよき他者、理解者の存在もまた不可欠であることがわかったのではないだろうか。

結論

「中国人」、「中国系アメリカ人」というアイデンティティを確立できない Donald にとって、「アメリカ人」になるためには、その中国性を否定しなくてはならなかった。Donald は父親を始め多くの中国系の人たちが中国性にこだわり続けるために、中国系アメリカ人たちは本物の「アメリカ人」になれないと考えていた。その価値観の形成には、学校で習った中国人に対する

“Passivity”、“not competitive” (92) といった評価が大きく影響している。また Fred Astaire に象徴される、メディアによって作られた「アメリカ人」像も、彼の理想とする「アメリカ人」という価値観の根幹にある。しかし、彼はそれらを相対化して見ることができず無批判に受け入れ、その像を自らのなるべき姿と想像し、自分と同じ考えができずに中国文化にこだわる同胞を批判していた。

彼の「アメリカ人」像を見直すのに大きな影響があったのが、大陸横断鉄道建設の夢だ。夢の中ではあるがそこでの苦難を自ら経験し、授業で教えられた消極的で競争心がないために搾取されてきたという中国人像が一面的な見方であり、史実とは異なることを Donald は理解する。中国人がアメリカ建国に一役買っていた事実から、「中国系アメリカ人」もアメリカを構成する存在であることを自覚したにちがいない。

これらの経験は Donald の現実世界の受容の仕方に影響を与え、春節中、父親やおじたちから教えられる中国文化への関心を高める。その意味を深く理解し、あらためて自分の中国人としての属性に Donald は目を向け始める。父親 King が中華料理という独自の「具材」で多くのアメリカ人たちを喜ばせ、アメリカの食生活を豊かにし、トマトではなく「中国人」という「具材」としてスープに彩りを添える役割を果たしていることに気づき、Donald はアメリカを構成する人種のもつ多様な役割、独自性に気づいたのではないか。また、そこには自文化のよき理解者が不可欠であることも自覚する。Donald と Arnold が龍の一部となりパレードするシーンは、二つの人種が一つの龍を作り上げている点で、アメリカを象徴している。

こうしたプロセスを経て、Donald はこれまで自分が抱いていた「アメリカ人」像が一面的なものであることを自覚し、自分のルーツ、文化を深く問い直すことで、これまでとは異なる「中国系アメリカ人」としての自らのアイデンティティを構築するにいたるのである。

注

- 1 イニシエーション・ストーリーについては、拙論「“The Island of Doctor Death and Other Stories” 研究—永遠のイノセンスへの試み」『大阪学院大学外国語論集』第67号（2014）を参照。
- 2 拙論「*Writers on America*に見るアメリカの理念と作家の役割」『大阪学院大学外国語論集』第76号（2018）を参照。
- 3 ドルフマンとマトゥラールは、Donald Duck を中心に Disney 作品を文化帝国主義的な視点から論じ、Disney が『『米国的生活様式』の宣伝係』（171）であると指摘し、「真の脅威は、彼が米国的な生活様式（American way of life）のスポークスマンであることではなく、彼が米国的な生活の夢（American dream of life）を代表していることにある」（171）と述べている。この視点は、「アジア系アメリカ文学」という言葉を初めて定義づけたアンソロジーの編者の一人である Frank Chin の、白人文化とは一線を画す姿勢と共通する面が見られる。Donald Duk という名前には、そのような意図も込められているかもしれない。
- 4 本論から少しずれるが、これは読者に中国文化を伝えるための手段であり、*Writers on America* の作家たち同様、中国系作家として自文化を広く認識してもらいたいという作者 Chin の意図が感じられる。李有成によると、Chin は、「中華系アメリカ人とは結局のところステレオタイプの産物」（106）と考え、それを多くの人に自覚させようとしていたようである。次のインタビューからは、Chin が中国系も含め、広く自文化を知って欲しいと考えていることがわかる。

Everyone is saying, “Gee, I hate Chinatown. I’m not typical of Chinese at all. I want to get out.” But they don’t say what Chinatown is good for, or what the people who live in Chinatown and like Chinatown, like about it. And so I said, “Hey, there’s a

big hole there. Let me fill that hole.” (チン 23)

また、植木照代は Chin をはじめ中国系アメリカ人作家の創作活動について、「[……] オリエンタリズム的言説の呪縛から自らを解放し、同時に自身の生まれ育ったルーツとの関係を測り直し、外社会に向けて飛翔するための必要不可欠な作業であったと考えられる」(xix) と述べているが、やはり、この作品が自世界の内と外に向けて発信されていることを示唆する。

- 5 この場面について、李有成は、「白人の人種差別を嫌というほど受けた中華系アメリカ人のような民族的マイノリティにとって、ドナルドの夢が表象する過去—白人が打ち負かされ、中国人が勝利する—というのは確かに美しく輝かしい過去である。ドナルドは夢を通してその民族の記憶を再構築するとともに、啓蒙儀式を行っており、祝賀活動の中で獅子舞を踊る役目を仰せつかっている」(111) と述べ、白人に対する中国人の勝利を示すという捉え方をしている。

引用文献

Chin, Frank. *Donald Duk*. Minneapolis: Coffee House Press, 1991.

Gouge, Catherine. “The ‘Glorious National Problem’: Frontierism and Citizenship in Frank Chin’s *Donald Duk*.” *The Journal of American Culture*, 31:3, 2008. <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1111/j.1542-734X.2008.00675.x/> Accessed 25 Nov. 2021.

植木照代監修 『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社 2011年

チン、フランク “I See Asian Culture, Asian Civilization in America Threatened.” 『時事英語研究』2月号 研究社 1994年

ドルフマン、A. マトゥラル、A. 『ドナルド・ダックを読む』山崎カヲル

訳 晶文社 1999年

西山隆行 『移民大国アメリカ』ちくま新書 2016年

山口修 「“The Island of Doctor Death and Other Stories” 研究－永遠のイ
ノセンスへの試み」『大阪学院大学外国語論集』第67号 2014年

— 「*Writers on America* に見るアメリカの理念と作家の役割」『大阪学院大学
外国語論集』第76号 2018年

李有成 「フランク・チンと中華系アメリカ文学」『中国21』42 羽田朝子訳
東方書店 2015年

A Study of Frank Chin's *Donald Duk*: A Process of Acquiring Donald's New Identity

Osamu Yamaguchi

This paper shows that Frank Chin's *Donald Duk* is an initiation story of the main character, Donald Duk, and clarifies the process of how Donald changes his old idea of his identity, and acquires a new identity as a Chinese American.

Donald Duk is a story of a Chinese American boy, Donald Duk, who wants to be not a Chinese American, but an "American." Donald lives in Chinatown in San Francisco, but he denies his Chinese identity and the Chinese culture to which he belongs. He cannot stand that people around him are satisfied with being Chinese Americans. He wants to be an "American," but this means an "American" who has mainstream American cultural values, so called WASP values.

During Chinese New Year, he dreams about building a transcontinental railroad every night with his white friend, Arnold. Donald appears in this dream, and experiences what his Chinese ancestors who worked as laborers did when they built the railroad in the 1860's. In this dream, he finds that the Chinese were not passive and nonassertive, as his teacher had taught him in class. Further, he discovers the fact that in a photograph after the completion ceremony of the railroad, there were no Chinese men, and that there were no Chinese names recorded in books about the railroad. Through this experience in his dream and experiences

with his father, his uncle, and his friend Arnold in Chinatown, Donald changes his images about the type of “American” who he wants to be and accepts to live as the Chinese American that his father wants him to be, and acquires a new sense of values about his identity as Chinese.